

桜の野生種から栽培品種への道 — 総論と歴史 —

池谷祐幸（農研機構・果樹研究所）

世界の桜と日本の桜

- 世界の桜
 - 桜はバラ科サクラ属サクラ亜属に属する
 - 北半球の温帯から暖帯に分布し、分布の中心は中国西南部、日本は分布の端だが種数が多い
- 日本の桜
 - 野生種は10種
 - 江戸時代以前からの栽品種の主要な祖先種は4種（オオシマザクラ、ヤマザクラ、カスミザクラ、エドヒガン）
 - その他の6種は近現代になって園芸利用されたものが多い（オオヤマザクラ、タカネザクラ、ミヤマザクラ、ヒカンザクラ、マメザクラ、チョウジザクラ）

桜の観賞史(1)

- 縄文、弥生、古墳時代
 - 日本人と桜の出会いは樹皮の利用
 - 食用には殆ど利用していなかった
- 奈良、平安時代
 - 古典文学の出現頻度を見ると、奈良時代は梅の観賞が主流、平安時代に桜が主流になったように見える
 - なぜ、桜が愛でられるようになったかはわからない
 - 古代都市の発達による周囲の二次林化により、桜が目立つようになったことは原因の一つだろうが、それだけでは説明できない
- 鎌倉、室町時代
 - 鎌倉に政治の中心が移り、オオシマザクラが栽培されるようになった
 - 幕府の京都回帰により、オオシマザクラは京都でも栽培された
 - 室町中期には、現在に名の伝わるオオシマザクラ系の栽培品種が誕生した

桜の観賞史(2)

- 江戸時代

- 平和の世の到来、文化経済の発展により花見が大衆化
- 庶民が中心になった園芸植物の発展(古典園芸植物)
- 武家庭園と植木業界の発達の影響で桜の栽培品種も多様化
- 木版出版や彩色画などによる桜の文献が多数出現



特定の形の桜に、特定の名が付けられ、接ぎ木で大量に増殖され、文献で記録されることにより、現在に通じる「栽培品種」が出現した

- 近現代

- 幕府、武士の消滅により武家庭園の殆どが消滅
- 桜は高木のため、個人で保存できる者は少なく、消滅の危機
- それでも篤志家により保存・増殖された
- 高度成長期にいたり、ようやく公的機関での収集・保存活動が始まった

桜の栽培・繁殖・品種改良の歴史

- 江戸時代より前の資料はほぼ皆無
 - 断片的な記述があるだけなので、推測するしかない
 - 木の山取り、移植などの技術は歴史時代以前からあっただろう
 - 接ぎ木も古代以前に大陸から伝わっていただろう
 - 植木屋の出現は室町時代

- 品種改良の歴史は殆ど分からない
 - 偶発実生からの選抜は行われていた
 - 江戸時代に人工交配が行われていた可能性はほぼない
 - 明治以降は長い間品種改良は停滞し、戦後になって個人育種家等により、新たな品種が産まれるようになった